

夫がなされた句であった。大西さんは全部で四句を読んでおり、「秋の色」という繋がりをもって全体を構成している。これらの全体性、技巧性、及び本人の努力が大いに作品から感じられ、グランプリにふさわしいと評価した。大野友輝君、佐々木龍聖君の作品は「色」の着目点が独特で興味深い。行事、日常の一コマを切り取り、作り手の感動が直接的に伝わってくる。陶國多聞君の作品は、末句のはずむリズムが語句の選択によって生かされている。しかし、季語が入っておらず、「有季定型」の形で作るといふ趣旨から外れているため、佳作となった。テーマの「色」を様々な活用する作品が多く、若者の柔軟な発想が一番発揮されていた部門だったという印象をうけた。韻文という特質の生かし方が今後の課題である。リズムや音の響きを意識し、作品の中に組み込んで欲しい。

最後に一言。今年もネットからのコピペによる盗作が発見されている。盗作は犯罪であり、特に、IT関連の技術者を狙う諸君らにとっては、絶対にやってはいけない行為である。来年はこのようなコメントを書かずに済むようにして欲しい。

## 入賞作品紹介

〈高松キャンパス 読書感想文〉

優秀賞

「知る」ことから「学ぶ」

電気情報工学科 2年 浅川 万知

今、私は17歳。「今すぐ働いて、家族のためにお金をかせげ。」と言われたら、何ができるだろう。仕事のための資格も何も持っていないし、一日中働くことができるかどうかさえ自信がない。大人である父が働く姿を見ても毎日働くのは大変だなと感じる。

しかし、現在世界中で、5歳から17歳までの子どものうち、7人に1人が、一日中ひたすら働いていることを知った。学校にも行けず、自由に遊ぶこともできず、三度の食事さえとれずに。しかも朝から晩まで、手でサッカーボールを縫い続けて、手にするお金はたった1日45円。7歳で突然目が見えなくなっても、手探りで11歳までボールを縫い続けたインドの少女。ニカラグアでは化学肥料や農薬にまみれながら、炎天下でトマトを収穫し、1日150円をもらう10歳の少女。また病気の家族のために、「家事使用人」として雇い主の家で朝5時から夜まで家事をこなすベナンの少女もいる。

「子どもが働く」というと「お手伝い」とか「アルバイト」が思い浮かぶ私にとって、この事実は衝撃だった。一日中働かされる上に、子どもの安全も健康も全く保障されていないのだ。仕事の途中で身体が不自由になったり、命を落したりする子どももたくさんいた。大人は何をしているんだろう。法律はどうなっているのか。なぜ、今すぐやめさせることはできないのか。次々に疑問が頭の中に浮かぶ。

日本なら労働基準法で、働くことのできる年齢や時間

などが決められている。子どもを働かせている国も法律を作ればいいのに、と簡単に考えた私は、またショックを受けることになった。

実は国連で採択された国際的なルール「子どもの権利条約」が1989年に採択されているのだ。子どもが生きる権利や、教育を受けたり、遊んだりできるというあたりまえのことができる権利や、守られている権利について細かく定められている。なのに、なぜ児童労働がなくならないのか。

児童労働をしている子どもたちは、たいてい家が貧しいとか家族が病気であるという理由が働けなくなってきている。やめると家族全員の命に関わるため、子どもたち自身が逃げ出したり、ひどい労働環境を訴えたりしないことも多いそうだ。親がそのような状況を知っていても声をあげようとしてもしないことさえあり、いくら法律を作ってもなかなか子どもたちを救うことができないのだ。法律に違反した雇い主が処罰されることはごくまれだと知り、私の心はますます重苦しくなった。

そして何よりも私がつらかったのは、私たち自身がこの児童労働に加担しているという事実だ。私は何も知らずに子どもたちが収穫したバナナを食べ、子どもたちが乾燥させたり煎ったりしたコーヒーを飲み、子どもたちが接着剤で身体をこわしながら作ったスポーツシューズをはいているのだ。もちろん、私たちはお金を払ってそれらを購入している。でも子どもたちに届くお金はそのほんのごく一部。そして子どもたちは私たちの食べるおいしいバナナもコーヒーも口にせず、スポーツシューズをはくことなどないのだ。

私の身の回りにあるたくさんの品物。よりよいものを選んで買ってもらった物。これらのものにどれだけの子どもたちの手がかかっているのかと考えると、のんきに買い物をする自分が許せなくなる。品物を手に取った時、どこでどのようにして作られるのか、どんな人たちが作っているのか。機械でなく、「手作り」と書かれた製品はいいかと単純に考えていたが、いったい「だれの」手作りなのかを考えたこともなった。

今、児童労働から子どもたちを救うために働く大人たちがいる。襲撃を受けながらも命がけで子どもを悪質な雇い主から救い出す人たち。そして子どもたちが過酷な労働につかなくてもよいように、まずは教育を受けられる環境を作ろうとしている人たち。能率よく安全に農業を行う方法を教えることで、安易な児童労働をやめさせようとする人たち。子どもの周囲の大人を教育し、考え方を変えることがまず必要だと知り、子どもだけの問題ではないのだと気づいた。

他の国が働きかけたり、大企業を動かしたりして、子どもが働かなくてもよいあたりまえの社会にしていこうとする動きもある。「フェアトレード商品」という「児童労働」に関わっていない商品を買おうとする取り組みは、私たちも今すぐできることである。そして、働く子どもたち自身が意見を述べられる場も設けられるようになった。

私は、物事の一面しか知らないということの危険性を知った。知らなければ正しい方向にも進めない。世のことを他人事として考えるのではなく、自分はどう関わられるか、何ができるかを考えていきたい。この一冊は、これからの私を大きく変える一冊になったのだ。

『わたし8歳、カカオ畑で働きつづけて。』

児童労働を考えるNGO=ACE岩附、白木、水寄 共著 合同出版 2007

## 〈高松キャンパス 読書感想文〉

### 佳作

#### 多動力

建設環境工学科 4年 木村 真人

私がこの本と出会ったのはとても偶然でした。ある日、時間が空いたので本屋に立ち寄りしました。特に目当ての本があるわけでもなく適当に店内を徘徊していると、ふっとこの本が目につきました。私は日頃から読書をするタイプではないので、このような自己啓発本は読めるはずがないと思いました。しかし、せっかく目についたので少しだけ見てみようと思いその本を手にとると、想像以上に興味が湧き、購入してみました。結果として、この本との出会いが私の考え、人生に運命を与えることになりました。これまでの私は、特にハマるものがあるわけでもない、飽き性なので物事も続かない、といったような刺激の少ない人生でした。しかし、この本と出会って以降、物事の考え方や、人、社会の見方が少しずつ変わってきたのを実感しています。

多動力とは何か。それはいくつもの異なることを同時にこなす力のことを言います。これからの時代は多動力こそが最も必要な能力だと、この本は言っています。この言葉が私の心に大きく響きました。ではなぜ多動力が必要な能力なのか。結論から言うと、いずれはインターネットが全ての産業に進出し、あらゆる仕事の基幹システムになると考えているからです。インターネットは水平分業型モデルと呼ばれています。反対が垂直統合型モデルと呼ばれ、テレビ業界がその例です。各局が番組製作から電波の送信まであらゆるレイヤーの業務を垂直に統合しています。インターネットは真逆です。電話もフェイスブックも、動画もゲームも電子書籍も、全てスマホ上のアプリという一つのレイヤーの中に並べられています。IoTという言葉が存在するように、テレビなどの家電はもちろん、自動車も家もありとあらゆるモノがインターネットにつながるのも時間の問題です。そうすると、すべての産業が水平分業型モデルとなり、タテの壁が溶けていきます。この、あらゆる産業のタテの壁が溶けていく、かつてない時代に求められる能力が、次から次に好きなことをハシゴしていく多動力であるといえます。では、具体的に多動力とはどういうことなのか、初めに書かれていた衝撃的な言葉は「寿司屋の修行なんて意味が無い」です。なぜなら、今の時代はオープンイノベーションであるからです。誰かが発見した様々な技術やノウハウは、どんどん情報として公開されています。このことを知らずに自分で技術やノウハウを探っているのは非常に時間の無駄です。この考えには本当に感動しました。石の上にも三年、と上司や親方からの修行を耐え続けるのではなく、まずはその技術、ノウハウが過去にあったのかを調べ、情報が公開されているなら、それをマネしてしまえばいい。圧倒的に効率が良くなるだろうと感じました。また、手作り弁当より冷凍食品のほうが美味しい、とも書かれていました。この言葉の真意は、全ての物事で、100点を取らなければいけない、という考えを捨

てることです。全てで100点を取ろうとし、追いこまれてしまっただけでは、大量のアウトプット（仕事）をこなすことはできません。時々、手抜きをすることで、膨大なアウトプットを継続的に行うことができます。しかし、ここで注意をしないといけないのは、どこまでの手抜きをするのか、どこで手抜きをせずに、100点の力で仕事をするのかです。そのことも本に書かれていました。自分が最も力を発揮できる仕事をやろう、とこの本は言っています。すなわち、自分にしかできないことや、自分の好きなこと、得意なことは全力で行うべきなのです。そして、それ以外の仕事は、手抜きをしたり、他人に任せたりすれば良いと言っています。これまで、学校でのレポートやアルバイト、様々なことを行ってきましたが、大人でこのようなことを言っている人は、著者の堀江貴文が初めてであり、感銘を受けました。

この本を読み、私が一番に感じた事は、大人になっても子どものままで良いということです。大人になると、ほとんどの人は価値観が決まっていき、固定概念というものが増えてきます。しかし、その価値観や固定概念にとらわれていては、これからの時代を乗り切っていけないと思います。誰も予測できないようなスピードで技術が進歩している中で、大切なのは子どもの心です。子どもの心を持ち、興味のあることには、後先考えずにつこんでいける行動力と勇気。これらを持っている人がこれからの世の中で活躍していける人だと感じました。この本は、今後の世の中への変化についていけるか不安な人や、自分のやりたいことが何かわからない人に読んでもらいたい一冊です。

『多動力』 堀江貴文 著 幻冬舎 2017

## 〈高松キャンパス 千頁読破記〉

### 優秀賞

#### 千頁読破記

建設環境工学科 4年 山地 夢十

「ミニマリスト」という人達の事を知ったのは、片付けのできない自分を変えたくてネットで片付けの方法を調べている時だった。その人たちの部屋を見てみると数えるほどしか物がないのに、沢山物がある僕の部屋よりずっと豊かに見えた。「ミニマリスト」たちの考え方「ミニマリズム」に興味を持った僕は、今回読んだ本たちを手にとった。

最初に読破した感想を言ってしまうと、社会に出る前にこの考え方を知ることができて本当に良かったと思った。もし知らずに社会に出てしまっていたら、自分の人生にとって重要ではない物を買うために給料を垂れ流し、自分のやりたいこともできず一生を終えていたかも知れない。そう思うほどの衝撃を受けた。

ミニマリストについて誤解しないでほしいのが、彼らはただ部屋の物を減らすことを生きがいに行っているのではないということだ。自分にやりたいことがあってそれ

に集中するために、その他の物を最小限にする。物を減らすのはあくまで手段であって、目的ではない。

僕は一人っ子で、幼いころから欲しいと言えば大体の物は買ってもらえた。部屋の中のあれもこれも、そのときどうしても欲しくて買ったお気に入りの物。でも今は使っていない。またいつか使うかも・いい思い出だからと、とりあえず部屋に残しておく。それが繰り返されて僕の部屋はできていった。そしてその片付かない物たちのせいで、今やりたいことに集中出来ない。それでも思い入れのあるおもちゃ、ゲーム機、服や本はなかなか捨てられない。そうしてなかなか片付けられず、悶々としていたところでミニマリズムに出会った。

ミニマリズムは「今」が大事なのだと改めて教えてくれた。「過去への執着」と「未来への不安」に囚われず、自分が今やりたいことに全力を尽くす。僕の場合であれば、学校での勉強と趣味の卓球がそれに当たる。この二つをしているときが一番充実しているから、これに集中するために他のことは最小限（ミニマル）にする。それを意識し始めてから、日々の生活はうまくいっていると思う。不安を挙げるとすれば、ミニマリズムにはまりすぎて他人に強要してしまわないかぐらいだろう。

興味のある人はぜひネットで「ミニマリスト」と検索してみてください。あなたの価値観を変えてしまう世界がそこに広がっているかもしれない。

『僕たちに、もうモノは必要ない。』

佐々木典士 著 299頁 WANIBOOKS 2015

『僕たちは習慣で、できている。』

佐々木典士 著 332頁 WANIBOOKS 2018

『手ぶらで生きる。』

ミニマリストしぶ 著 224頁 sanctuary books 2018

『人を思い通りに操る 片付けの心理法則』

メンタリストDaiGo 著 240頁 Gakken 2017

『人生がときめく片付けの魔法』

近藤麻理恵 著 270頁 サンマーク出版 2010

## 〈高松キャンパス 夏休み体験文〉

### 優秀賞

## 霧箱と放射線をめぐって

建設環境工学科 4年 三笥 憲伸

香川高専高松キャンパスの学生玄関ホールには、平成26年に霧箱が設置されました。霧箱は、放射線の飛跡を観察するための装置です。霧箱の中に人工の放射性物質は入れていないので、見える霧は自然放射線の飛跡だととらえることができます。霧箱の存在が当たり前となった今、かつてのような珍しさはなく、入学当時はすごいと感じていた人もまるで見向きもしなくなりました。果てには、霧箱の稼働は電力の無駄であり、霧箱を停めてエアコンを動かすべしとの意見もたびたび聞かれる始末です。僕は、平成27年の夏から部活動で放射線の研究を行っていて、研究の動機である霧箱が爪弾きされている現状を

残念に思っていました。しかし、どれだけ学校の霧箱がすごいとって魅力を語ったとしても、それは誰にもうまく伝えられていませんでした。

さて、今年の夏休みは、インターンシップで茨城県へ行くことになりました。そこで休日を利用して、香川高専以外の霧箱の見学に行きました。

初めに訪れたのが、茨城県那珂郡東海村にある原子力科学館です。東海村は日本で初めて原子炉が稼働した村で、原発以外にも原子力の研究施設がひしめく原子力の村です。

まずは館内をぐるりと見学しました。黒を基調とした館内は、近未来を想像させました。放射線や原子力の発電について分かりやすく展示されていて、子どもでも楽しめるような工夫が随所にされていました。

そして、ついに霧箱を展示しているコーナーへ行きました。説明には世界最大級の文字が躍っています。見た瞬間、その大きさに圧倒されました。天面のガラス面積は香川高専の霧箱が80センチ四方であるのに対し、原子力科学館の霧箱は120センチ四方もありました。その中では、見慣れた霧が発生しては消えていきました。周囲が明るいために、若干の見にくさはありませんでしたが、それでもその大きさはすごい一言に尽きました。

翌週、福島県田村郡三春町のコミュタン福島へ行きました。コミュタン福島は東日本大震災のあと、放射線や環境問題の理解のために設立された科学館です。ここには、香川高専の霧箱と同じ会社が製作した霧箱が展示されています。

館内の展示でひとときわ目をひいたのが福島第一原子力発電所の模型です。水素爆発で壊れた原子炉建屋や、津波の影響であちらこちらに散らばる資材など、改めて被害の大きさを感じました。模型以外にも当時の新聞記事や、多くの写真が展示されていました。原子力は便利なエネルギーですが、ひとたび異常が発生すると、そのコントロールが難しいということを物語っています。館内は白を基調としていて、明るい雰囲気でした。また展示内容からも近未来というよりは、福島の今を強く感じました。

ひとしきり展示を見学した後、霧箱を見に行きました。外見はパネルが白色であるものの、構造は香川高専のものとはほとんど同じでした。しかしよく見ると、改良された箇所が何カ所もあり、まさに妹分といったようでした。大きさは同じですが、学生玄関ホールよりも暗いところに設置されていることもあり、霧が鮮明に見えていました。ただし、福島県だから香川県よりも多くの霧が発生するというのではなく、こちらと何一つ変わらずただ自然放射線の飛跡を映し出していました。

コミュタン福島を訪れたのは日曜日だったので、家族連れが多かったです。そんな中、子どもたちが「あっ、霧箱!」と言って駆け寄る光景は非常に微笑ましいものでした。霧箱が親しまれている様子を見て、遠くまで来て良かったと思いました。建物を出ると、霧がかかっている、風も涼しく、短い東北の夏の終わりを告げているようでした。

インターンシップも無事に終わり、四国へ戻ってきました。そんな夏休みの終わり頃、高専に登校しました。まだ補講期間が始まる前で人影はまばらです。普段より

一層ひっそりした空間に霧箱の冷凍機の音が響いていました。

今回見学した2カ所の霧箱はどちらも素晴らしいものでした。しかし、霧箱の中には同じ光景が広がっていました。香川高専の霧箱は科学館に展示されている霧箱にも引けをとらない、そう再認識しました。

さて、不遇の香川高専の霧箱が最も多くの人に見てもらえる日が皆楽祭です。この日だけは見学したほとんどの人が「きれい」、「すごい」と言っています。今年ももうすぐ皆楽祭がやってきます。霧箱を設置した意義を果たせる日を待ち遠しく思います。また、学生にも愛される存在になることを願ってやみません。

## 〈詫間キャンパス 読書感想文〉

### 最優秀

### 「赤い指」を読んで

1年1組 音島 立哉

「どこの家でも起こりうること。だけどそれは我が家じゃないと思ってた。」どこにでもあるふつうの四人家族。主の前原昭夫、妻の八重子、中学生の直巳、昭夫の母の政恵。平凡なサラリーマンである昭夫は、認知症の母を抱えつつ、疲れた毎日を過ごしていた。そんなある日、一人息子が起こした女兒殺害事件により彼の生活は一変してしまう。

会社から帰宅した彼は、妻と争いながらも、死体を公園に隠すことを決め、実行した。

翌日から警察の捜査は始まり、前原家にも刑事たちがやってきた。彼らはうそをついたが、いつまでも隠し通せるものではないということは彼ら自身が一番よくわかっていた。

そのことを悟った彼らはある計画を実行することにした。その計画とはそう、認知症の母を犯人に仕立て上げることである。彼らは一日かけて作り上げたうそを刑事たちに話した。計画はうまくいくかのように思えた。しかし昭夫の母は実はほけておらず、息子にこの計画を断念してもらえるように、自分の指に赤い口紅を塗っていた。そしてその口紅を昭夫の妹、春美に事件が起こる前に預けていた。こうすることによって自分自身のアリバイを証明していたのだ。このことにベテラン刑事、加賀は気づいていたが、昭夫は彼の母に手錠がかけられるまで口紅が塗られていることすら気づかず、また、それが何を意味するのかも分からなかった。しかし、ついに彼の母が逮捕されるというとき、彼の心の防波堤は砕け散り、彼は涙を流してすべてを告白した。

私はこの小説を読んでいく中、昭夫に自分の将来の姿を重ね合わせていた。今何か行動しないと自分も将来こんな大人になるのではないか。このまま卒業して、平凡なサラリーマンになり、上司の紹介などで知り合った女性と結婚して子供ができ、幸せな生活を送る。私もこのような人生を送ることになるのだろうか。しかし、昭夫のようにはなりたくない。昭夫は全く幸せではなかつ

た。父が亡くなり、同居することになった母は妻と全くそりが合わず、家族に幸せというものはこれっぽっちもなかった。日本が高齢化しているからこそ何か対策すべきだったが、日本はこれといったこともせず、その代償として家族が負担を強いられている。実際に彼の母は認知症になり（実際は違うが）、彼女の介護を家族が負担することになった。

私の祖母はもうすぐ百歳になる高齢者だが、今までずっと元気だった。しかし最近会いに行ったとき、ほけ始めたという話を聞かされた。実際にあまり話を覚えてなさそうで、夜中に突然起きて何かをしゃべりだすこともあるそうだ。もう歳なので仕方ないのかもしれないが、やはりこれ以上症状が悪化してほしくないし、治ってほしいと思う。でも、まだ自分のことはほとんど自分でできていたし、デイサービスにも通っているそうだ。これからも元気でいてほしいと思う。

「親を何だと思っているんだ。」これは昭夫の台詞である。ほんとうにそのとおりである。この息子にしろ、昭夫にしろ、もっと親のことを大切にしなければいけないだろうと私は思った。親が認知症でも、家庭を顧みない父親でもそれは同じだ。確かにそんな環境に置いた親も悪いのかもしれない。しかし私は育ててくれた恩のほうが大きいと思う。

私はこの本を読んで、これからはもっと親のことを大切にしようと思った。いつ会えなくなるかわからないし、いつまで元気に会話できるかわからない。だからこそ、親と一緒に過ごす一日一日を大切に生きていきたいと強く思う。

『赤い指』 東野圭吾 著 講談社 2006

## 〈詫間キャンパス エッセイ〉

### 最優秀

### 諦めていた夢

通信ネットワーク工学科3年 前山 胡桃

「夢なんて叶うわけがない」「好きなことで生きていくなんて絶対無理だ」。何も挑戦したことが無いくせに偉そうに言ってくるくだらない大人に流されるところだった。やりたいとは思っていてもやっぱり人生はそんなもので、いつもその言葉が夢に向かおうとする時、邪魔をした。

私には夢がある。演技ができて、歌って踊れるアーティストになること。大きなステージに立って、たくさんの人に音楽を届ける。高校に入るときは踏み出す勇気がなかった。親に迷惑をかけたくなかった。だから勉強を選んだ。同年代くらいの子がテレビで活躍しているのを見ると悔しくて、やる前から、田舎だからアクターズスクールのようなそういう環境がないとか、勉強しながらは無理とかそういう言い訳みたいなもので気を紛らわして、何もできない自分を正当化し、本当にやりたいことから逃げてきた。

高校3年になって、夢のことも含め進路を考えている時に、あるアーティストオーディションを見つけた。自分から探したわけではない。でも、本当にやりたいと思って受けた。やりたいことにここまで本気になれたのは初めてだった。部活の回数を減らした。もう辞めようとも思った。勉強もやめた。勉強には力を入れていた方なので、そんなことありえなかったけど、もうそれも怖くなかった。ひたすらそのことだけを考えた。

オーディションには落ちた。でもそれでよかったと思う。夢を追うのに必死で周りが見えず、気づいたら何にもなかった。成績は下がった。自分のしてきたことを考えると、これが妥当な結果であることはわかっていたけれど、実際とると悔しかった。部活の練習も集中できなくなり、大会の目標は達成できなくてとても後悔した。この経験のおかげで私は変わることができた。頑張り方を間違っていることに気づけた。確かに、今まで頑張ってきたことや周りの意見、言い訳にしてきたことも全部投げ出し、夢に本気になったのは自分にとって大きな一歩であり、本気で叶えたいという気持ちがあった証だと思う。でもやっぱり勉強とか部活も頑張りたかった。テストでは自分の納得する結果を残したい。家族がほめてくれると嬉しい。これで最後の予定だった部活の大会で、このチームでする試合が本当に楽しかった。やめることなんて忘れるくらい。最後まで続けようと思った。だから、夢のために全ては捨てない。夢を叶えるためには何かを犠牲にしなければならぬと思いついてきたけれど、そんな大切なことよりもっと他に減らせる時間はたくさんあった。

3年後、就職で東京に行って、そこで夢を叶える。あと3年は、その時のために自分を磨いていく時間にしようと思う。今までたくさんのステージに立ってきた。そこからの景色は最高で、本当に大好きな場所である。だからこそ、もっと素敵な景色を見てみたい。思い込みや周りに流されて何もしなければ今までと同じ、絶対に夢は叶わない。高校3年生。17歳。スタートは少し遅れてしまったけど、まだまだ挑戦できるチャンスはいくらでもある。今は、今しかできないことを頑張りながら夢を追い続ける。その先もずっと可能性がゼロになるまで諦めない。最後までやり通してだめだったなら、その時初めて「夢なんて叶うわけがない」と言える権利があるのだろう。

## 〈詫間キャンパス 小説〉

優 秀

### 「私の太陽、あなたの太陽」

情報工学科3年 平岡 将

寒い。視界はかすみ、体は石のように固い。ああ、私はここで死ぬのか。霧のかかった頭で理解する。私はこの一生で意味を見いだせたのだろうか。私は思い返す。あの日もこんな雨の日だった。

雨の中、薄暗い路地の端で小さな段ボールの中でうず

くまっている。それが私の最初の記憶だ。私は寒さから逃げるように段ボールに潜り込む。寒い、怖い、死にたくない。私は必死に叫んだ。そして泣きつかれたころ、わたしは陽だまりのような、太陽に出会った。

「おかーさんただいま！」

「あら、こんな雨の日はどこへ行っていたの渚。あら、その子は。」

「犬！さっきそこで拾った！」

「拾ったって、あなたねえ。」

「うちで飼ってもいい？おねがい！」

「まったく、こんな雨の日に戻してこいなんて言えないし、お父さんの許可が出たらね。」

「はーい！」

夜になり、この家の長であらう大柄の男が帰ってきた。

「渚、飼うことは認めるけれど、お世話は自分でしなさい。」

その彼の言葉で、私には家族ができた。

これが私の人生のスタート地点だった。そうスタート、「私」という「個」が生まれた日だった。そうそう、この日、私には名前ができた。雨の日に拾ったから「拾雨」と書いて「しゅう」という名前だ。いい名前だと思わないかい？他にはどんなことがあったか、ああ、あんなこともあったな。私が拾われてから数年たった日のことだ。

家の雰囲気は暗い。何かあったのだろうか。異変を確かめたい私は小さく吠える。しかし、誰も答えてはくれない。それから数日たったころ、私もようやく状況を理解した。私の家族でもあり渚の父、彼が亡くなったそう。彼の葬儀が終わってから渚はずっと部屋にこもりきりだった。渚の母は悲しみを押し殺し、様々な関係者に事情を説明する日々に追われていた。強い女性だと思った。しかし忙しさのあまりか、渚までは目が及んでいないようだった。渚はここ数日、ご飯もまともに食べていない。私がなんとかしなければ、そう決意した。

その日から私はただずっと渚のそばにいた。ただじっとそばにいた。そして数日がたった時だった。渚は静かに泣き始めた。私はその時も何をするでもなく、そばにいた。その日から渚は変わった。ご飯も食べ笑うようもなった。渚の母も安心した様だった。

本当にいろいろなことがあった。人間から見たら短いかもしれないが、私にとってはとても長い幸せな日々だった。「ありがとう。」

伝わるはずもないが私はそう言葉にする。

「こちらこそありがとう。君は私の太陽だったよ。しゅう。」伝わったはずもないのに伝わったと思う私はおかしいだろうか。いや、伝わった。そう思うことにする。ああ、これが私の生きる意味だったのだな。私はそう思う。

なぜだろう、体はこんなにも冷たいのに、心はこんなにも温かい。



## 〈詫間キャンパス 小説〉

優 秀

### サンドイッチ

1年3組 玉川 小太郎

朝七時。二度目の目覚まし時計が鳴って飛び起きた。「起こせよ!？」と、八つ当たり気味な言葉をこぼす。布団から立ち上がり、朝の空気を、体いっぱい吸い込む。目が覚めたのはいいが、腹が減った。「母さん、朝飯は一?」という言葉が、口をついて出てから気付く。今日から一人暮らしだったのだ。

気は進まないが、仕方なくキッチンへ向かう。たくさんのが置いてあるキッチンには、雑貨や調理器具は無駄にあるのに、まともに食材がない。「買ってきておけよ…」誰に向けたわけでもない愚痴を言いながら、冷蔵庫や棚を漁る。しばしの苦労の末、なんとか卵を五つとキャベツ四半玉、食パンを見つけて、サンドイッチを作ることに決めた。まともに料理をしたことがない俺でも、それくらいなら見様見真似でなんとかなるだろう。鍋に水を入れ、湯を沸かす。卵を鍋に鮮やかに投げ入れて蓋をし、キャベツを軽やかに刻む。…卵はいくつか割れ、指を三本も怪我してしまったが、まあ誤差の範囲だろう。ひとまず指に絆創膏を貼った後、ボウルに卵を入れ、マヨネーズと混ぜ合わせた。キャベツとともにパンに挟み込み、皿に盛りつける。我ながらなかなか美しく盛り付けられたと思う。流石俺だ。記念に写真を撮っておこう。うん。綺麗に撮れた。せっかくなのでツイート

しておく。

おっと、無駄な工程を挟んでしまった。早く食べないと間に合わない。一つ手にとって急いでかじる。なんとなく予想はしていたが、あまり美味しくない。卵は水っぽく、キャベツは青臭い。母が作っていた通りに作っていたはずなのに、美味しくない。あまりに不味すぎてだろう、涙が出てくる。こんなもの、三十六計逃げるに如かずだ!捨ててしまえ!と言って捨てたいところだが、すこしもったいない。それになにより、そんなところを見られたら母に怒られてしまうだろう。不出来なサンドイッチを無理やり胃に押し込み、顔を引き締める。

ああ、いけない。もうそろそろ出かける時間だ。大急ぎで鞆に荷物を投げ込み、着替えを探す。だが、衣装ケースを探しても、タンスをひっくり返しても、まさかと思って洗濯機のなかを覗いてみても、目的の衣服は出てこない。スーツなどで代用することも考えたが、一応主役とも言える立場なだけ、ギリギリまで探したいと思ってしまう。あまり行きたくなかった場所だが、蔵のなかを探すことにする。古臭い建物、カビ臭いにおい。九十九神や魍魎魍魎でも出てきそう。なんとか目的の黒い服を引っ張り出し、埃を叩く。これを着なければ行けないと思うと、気が滅入る。朝飯を食べ終わってから十数分。パンパンに膨らんだ荷物をなんとか車に乗せ終わる。そして、必死で探し当てた喪服に着替えてとても間に合いそうにない葬式へ向かう。

母には謝らなければ。しかし、やっぱり俺一人では物事の一から十まで、朝の用意すらままならない。一生のお願いだ。頼むから、帰ってきてくれよ。母さん。

## 〈詫間キャンパス 短歌〉

優 秀 黒無地の キャンバス彩る 光の華 白煙にまかれ 風と去る

電子システム工学科4年 間部 帆乃夏

優 秀 紅に 咲き誇りしは 彼岸花 今年は何を 連れ行くかな

通信ネットワーク工学科3年 佐竹 櫻

優 秀 君光る 隣になないろ 花火燃え 私は落ちる 線香花火

1年2組 井澤 早紀

優 秀 観光地 オバサマたちが 色めき立つ はしゃぐその手に ポケモンGO

1年2組 真鍋 光

## 〈詫間キャンパス 俳句〉

グランプリ 「秋の色」

白ススキ 大空(そら)に雲描く 絵筆かな

電子システム工学科3年 大西 美帆

優 秀 灯籠を 流し照らすは 生きる色

情報工学科3年 大野 友暉

〈詫間キャンパス 俳句〉

**優秀** ちびちびと 月夜背にする 赤い顔

情報工学科2年

佐々木 龍聖

**佳作** 「高知に行きました」  
仁淀川 青き水面に 石踊る

1年3組

陶國 多聞

〈詫間キャンパス 写真〉

**最優秀** 無題 (カラー作品)

電子システム工学科2年 尾崎 玲音



教員・学生による推薦図書

※推薦図書は図書館で貸出できます。

教員〈高松〉

地平線の相談

▶ 細野 晴臣、星野 源 (著) (文藝春秋)

細野晴臣は、松任谷由実のデビューを支え、イエロー・マジック・オーケストラで世界にヒットを飛ばし、80年代アイドルに多くの曲を提供し、今も(星野源とか)多くのクリエイター達に影響を与え続けている。(もともともある。続きはWebで。)間違いなく偉大なミュージシャンだが、そう呼ぶにはあまりにポップで軽やかで、40年以上ずっとカッコいいまま。これは星野源との共著なので皆さんにも入りやすいはず。ぜひこの機会に素晴らしいホソノワールドへ。ちなみに、私は日本ではこの人のベースが最高だと思います。

一般教育科教員 高橋 宏明

不登校でも大丈夫

▶ 末富 晶 (著) (岩波ジュニア新書)

あなたは、学校に行きたくないと思ったことがありますか?行きたいけれど、体が動かない。そんな経験はありますか?この本は不登校を経験した著者が、自身の体験を振り返って当時感じていたこと、考えていたことなどを綴られた本です。たまたま旅先の本屋さんで手に取った時、私は心のどこかで「暗い内容の本なのかなあ」と思っていました。しかし、著者の末富さんがゆっくりと、そして丁寧にご自身と向き合って書かれた言葉はあたたかく、そして力強く、最初に(私が勝手に)抱いていたイメージとは全く異なるものでした。読み終わった時には本に込められたメッセージに背中を押されるような不思議な感覚を抱きました。タイトルが気になった方、学校のことや、進路のことなどでちょっと不安を感じている方、良かったら手に取ってみて下さい。

機械工学科教員 木村 祐人



天才

▶ 石原 慎太郎 (著) (幻冬舎)

私が推薦する「天才」という本には、かつて首相を務めた田中角栄氏の半生が描かれています。田中氏は一般的な政治家と異なり、自身が思い描く「明確な日本の将来像」を国民に提示した上で、「明確な数字」を用いて計画を遂行していきました。自身が成し遂げたい夢を持っていること、数字による裏付けができることは、技術者の卵である高専生諸君にこそ欠かせないものです。本書を手に取ってみて、田中氏がいかんにしてそのような能力を身に付けていったのかを学んでみてください。

電気情報工学科教員 吉岡 崇

色と顔料の世界

▶ 橋本 和明 (監修) 顔料技術研究会 (編) (三共出版)

“色って何?”と問われて、あなたはどうか答えますか。物理の授業では、波長の違いが色の違いと習ったかもしれませんが、でも、これは純色(単色)のお話です。身の周りの多くの色は混色(複数の単色やある波長範囲の単色を色々な割合で混合した色)であり、人の目を感じる色を工学的に表現するには客観的な指標が必要です。この本の第1章で色の表現法を知り、2章以降で色を実現する顔料の世界を覗いてみましょう。

機械電子工学科教員 平岡 延章

## IoT/センサの仕組みと活用

▶ NTTデータ(河村・大塚・小林・小山・宮崎・石黒・小島)(著)(翔泳社)

IoT (Internet of Things) の主役は、インターネットとそこで動くプログラムたちですね。でも、もう一つの主役は、センサです。センサの実装によりモノが感覚を持つことで、人の手を介することなくモノ同士が情報交換し便利な機能や魔法の環境を実現してくれます。この本には、IoTの基本から始まり、IoTを構成する要素、IoTを利用したデータ分析、そしてIoTで繋がるウェアラブルデバイスまで、図を多く用いてやさしく書かれています。

機械電子工学科教員 平岡 延章

## シャーロック・ホームズの冒険

▶ アーサー・コナン・ドイル(著)(東京創元社)

ご存知、シャーロック・ホームズと、ジョン・H・ワトソンの織り成す冒険小説の要素を含む推理小説です。100年以上前の作品のため、捜査手法、技術は、現代のものに遠く及びませんが、観察力、洞察力、論理的思考など、自然科学(土や水など)を対象とした研究や仕事を指す人にとっては、現代にも通ずる興味深い視点からの内容も含まれています。ただの推理小説と侮ることなかれ!

建設環境工学科教員 荒牧 憲隆

## 教員〈読問〉



## 歴史の楽しみ方 忍者・合戦・幕末史に学ぶ

▶ 磯田 道史(著)(中公新書)

## 日本史の内幕 戦国女性の素顔から幕末・近代の謎まで

▶ 磯田 道史(著)(中公新書)

最近寝る前に歴史書をよく読んでいます。43歳という人生の折り返し地点を迎えて、「自分はどこからきたのか? 先祖はどこからきたのか? 人類はどこからきたのか?」と漠然と考えようになりました。歴史書に興味を持つようになったのも、これらの疑問に対する答えを自分なりに見つけたくなったからでしょうね。そんな時に出会ったのがこれらの好著でした。

一般教育科教員 森 和憲

## レポートの組み立て方

▶ 木下 是雄(著)(ちくま学芸文庫)

私が担当している工学セミナーでの学習項目「理科系文書の作法」で利用した課題図書です。読問キャンパス図書館には1クラス人数分の同書を揃えてもらっています。同じ著者の「理科系の作文技術」(中公新書)は特に有名な本で、理系学生の必読書となっています。推薦する図書は、読者の対象をより広い大学生・社会人と想定していて、ものごとを文章によって正しく伝えるための要諦を、きつと見つけることができるでしょう。

通信ネットワーク工学科教員 井上 忠照

## 人工知能は人間を超えるか ディープラーニングの先にあるもの

▶ 松尾 豊(著)(KADOKAWA)

「人工知能・AI」という言葉が連日のようにテレビ、ネットを騒がせています。一体全体、私たちの知らないところで何が起きているのでしょうか? この本では、現在のAI技術について、何がすごいのか、何ができて何ができないのか、これから何が起ころうとしているのか、とても分かりやすく解説されています。今後ますます浸透するAIとどう付き合っていくのか考えてみてはどうでしょうか?

電子システム工学科教員 岩本 直也

## 生き物としての力を取り戻す50の自然体験

▶ カシオ計算機株式会社(監修)

株式会社 Surface&Architecture(編集)(オライリー・ジャパン)

偉大なる研究者の多くが自然を観察し、研究することで素晴らしい発見や発明を生み出してきた。一方、自然の中で遊ぶことが少なくなった現代の研究者は、どれだけの優れた発見や発明を生み出し、残していけるだろうか。この本を参考に、ふと立ち止まって石ころや葉っぱ、小さな生き物1つ1つを観察してみると、色やデザイン、音やニオイ、規則性や関係性など様々なことに気付けるでしょう。私のおすすめは「17太古に生まれた天然石を見つけよう」で、土器川では1月の誕生石ガーネットを見つけることができますよ。

情報工学科教員 宮崎 貴大

## 学生〈高松〉

## 理由(わけ)あって冬に出る

▶ 似鳥 鶏(著)(東京創元社)

ジャンルとしては、ホラー小説というよりミステリー推理小説でお化けや幽霊がニガテな人でも苦もなく、楽しく読むことが出来ると思います。内容は、幽霊が出るという噂が出て部活が出来なくなってしまい、困った部長の女の子と、主人公の男の子やその友達とで噂を確かめに行くが…というものです。物語の中では、奇妙な出来事がおこったり、夜の学校に忍び込み警備会社の人が駆け付けたりと、びっくりしたりドキドキしたりして面白いです。夢中になって読める本なので、ぜひ皆さんにも、読んで楽しんでほしいと思います。

1年4組(MS) 三島 大和

## か「」く「」し「」ご「」と「

▶ 住野 よる(著)(新潮社)

みんなには隠している、少しだけ特別な、人の心を形としてみる事ができる不思議なことから。人の心が見えたらいいなんて思うけど、見えることでかえって複雑にみんなの想いが絡まりあう。

誰かのことを考え繋がり合えることの大切さを感じ、こんな青春がしたい!と思える作品です。「君の臓腑をたべたい」「また同じ夢を見ていた」の作者が贈る、眩しくて、時に切ない青春小説、ぜひ読んでみてください。

建設環境工学科2年 泉 陽彩